

# 一般人の俺が幻想郷を 生き抜く為に

さわやか

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

知ってる人なら誰でも憧れるであろう幻想郷。

しかし現実的に一般人が生きる事は困難と言われています。

そんな不思議の箱庭に普通の人間が迷い込んだ時、何を思うのか？

日常と非日常と少しのシリアスを混ぜた東方系小説です。

# 目次

プロローグ		
ゴ・ダウン・イントゥー・ザ・ガーデ ン	1	
幻想郷から出る為に		
森の少女達	6	
幻想の里	14	
出れない箱庭	21	
幻想郷で生き抜く為に		
活路への希望	28	
弦月 降	34	
幼き主	40	
無邪気な吸血鬼	50	
		最悪の館
		60
		幻想郷を楽しむ為に
		第三の人生
		66
		知らない天井
		76



## プロローグ

## ゴー・ダウン・イントゥー・ザ・ガーデン

ある春の日。青い空。白い雲。地面を駆け抜ける黒い車体。唸るエンジン音。

僻地にひっそりと佇む峠。ガードレールすら無いが、人の一人もいない。

そこは自分の一生の中で唯一輝ける場所であった。

どんなに落ち込む事があっても、この峠でこいつと走れば、すべて吹き飛んでしまう。

景色が物凄い勢いで後ろへ流れていく。相棒は絶好調と言わんばかりに雄叫びを上げる。

太陽がヘルメットとアスファルトを睨み付ける。視界が光に包まれる。

そして次の瞬間・・・妙な浮遊感に襲われ、ゆっくりと目を見開くとそこには

足元に一面の緑が広がっていた。

「畜生……」

ゆっくりと体を上げる。体の節々が痛む……。どうやら生きているようだ。

辺りを見回すとそこには俺の愛車は無かった。記憶が曖昧なようだがどうやら途中で手離したらしい。

ヘルメットを脱ぐとひび割れていた。こいつが命を救ってくれたらしい。ありがとう  
A r a i . . .

……うん？つていうか俺落ちた？峠の崖から？えっ待つてよここ何処だよしかも愛車も無いし保険とかどうするつていうかそれどころじゃ

く10分後く

ひとしきりわめいて冷静になった。

辺りに人の気配はない。人工物すら見当たらないいくら見回せど木と草ばかりである。

勿論荷物なんて持って持っている訳も無い。全部テントに置いてきた。

上を見ると太陽は沈み始めようとしていた。

・・・あつ！携帯！携帯だけは持つてるよ俺！

ダメだった！これ粉碎されてるし！

あれ？俺詰んだかな？

民家やキャンプ地がある訳でも無く、食飲料もゼロである。おまけに現在地すら分からない。

さあここでクエスチョン！ここで私が取るべき行動はどれでしょう？

①夜を無視してとにかくまっすぐ歩く

②大声で助けを呼ぶ

③ここをキャンプ地とする

うーん・・・まず②は無い。水も無いのに喉からしてたまるか。まわりに人の気配も  
しないし。やるだけ無駄か。

となると①か③か・・・夜出歩くのは怖いな・・・でもずっとここにいても出られな  
いし・・・

結果的に今日は野宿をすることに決めた。迷子のときは動かないってかーちゃんも言ってたべ。

第一にまず水を探す。時点で食料。それだけあれば今日明日は乗り切れるだろう。思い立ったら即行動がモットーの自分は早速行動を始める。お腹すいたなあ。

〜数時間後〜

結果的に、辺りに食料は豊富にあることが判明した。

まず水。川を発見した。もう大丈夫。

それにどうやらこの辺りは人の手がかかっていなく、樹には木の実や果物さえ実っていた。

しかしこの事実はあることを気づかせた。人の手がかかっていない。

つまりこの地点から人が見つかる確立はゼロに等しいって事だ。なんてこった。

明日出発するとして果たして一日でたどり着けるのだろうか・・・

水と食料で腹を満たすと、こんどは睡魔が襲ってきた。そういえば今日は朝から動きっぱなしだな・・・

バイクウェアに、ボロボロのヘルメットを装着し草の上に寝転がる。こんな事をした



のは何年ぶりだろう？と昔を懐かしむ。

眠さが増してくるにつれ、自分が今いかに危険な状況に会っているのかに今更ながら気がつく。

人間窮地に立つと勇気とか行動力が増すと言うがここまでとは思わなかった・・・  
寝てる間に熊に食べられないといいなあ。そんな事を考えながら、深い眠りについた。

闇が訪れた森の中で、一人の少女が彼を見つけた。

その少女は心配そうに彼を見つめた後、ニヤリと笑い、

「こんな所で人間が寝てるなんて・・・今日はついてるのかー。」

その男の頭に、ガブリと噛み付いた。

幻想郷から出る為に

森の少女達

「あー・・・良く寝た・・・」

ヘルメットに差し込む朝日で目が覚める。

木漏れ日がちょうど昨日非日常を生きていた事を思い出させる。

しかしその後俺は奇妙な光景を目にする事となる。

「なんで幼女が俺の隣に・・・？」

俺は考える。昨日は誰も人に会ってない。周りに人の気配もなかったし家も無かった。  
た。

しかし隣で少女が寝ているという矛盾が頭を混乱させる。

そもそもここは日本である。ゆえに幼女が一人で野宿する理由なんてないのだ。

・・・いや、待てよ？矛盾とか理由とか無くたってどうでもいいじゃないか！

この子についていけば人に会える！そしてその人ならきつと出口を教えてくれるだ

ろう！

なんて幸運だ、ありがとう神様・・・

人に会うにはまず第一印象だ、川で念入りに体を洗い、準備万全。  
やさしく少女をゆすり起こす。

「ふえ・・・??」

「おはよう、お嬢ちゃん！」

我ながら清清しいほどの顔で微笑む。

「おはよう・・・おにいさんは、人間？」

「・・・？もちろんだとも！正真正銘の人間さ！」

「じゃあおにいさん、食べてもいい人間？」

「・・・はい？」

俺は耳を疑った。この少女は確かにこう言った。「お兄さんは食べてもいい？」と。

これはあれか。性的な意味なのか。まったくハレンチな少女だ！素晴らしい！だが俺にペド趣味はない！

「お兄さんは食べちゃだめだよ！」

「そーなのか・・・おにいさん固いもんね。」

「固い? どういう事だい?」

「寝てるときに、食べようとしたのだー。固すぎて食べれなかったのだー。」

「どういふ事だ! もしやこの少女、寝てる間に俺の\*自主規制\*を\*自主規制\*しようとしていたのか! 世も末だな。」

カワイイ顔しやがって、全く親の顔が見てみたい・・・

「とりあえず、君の名前は?」

「ルーミアなのだー!」

「始めましてルーミアちゃん、俺は・・・あれ? 俺は?」

「どうかしたのか?」

「あ、あはは。ちよつと待つてくれ・・・」

ヤバい。非常にヤバい。なんだこれは。ありえん。いや普通に考えてありえない。

でも・・・名前が、思い出せない。

というか諸々の記憶が飛んでる。特に名前類がやばい。

「具合でも悪いのか?」

「いや、それが、その・・・」

俺は今の状況を少女に説明した。だいぶパニックった頭で。

「名前が思い出せない?」

「そうなんです・・・」

「自分の名前も忘れちゃうなんて、ホントにバカなのだー。」

「いや、そうではなくて・・・」

「で、何の話だっけ？」

「ああ。ルーミアちゃん、ここから出る方法は知ってるかい？」

「知らないのだー。」

「そうか・・・じゃあこの辺りに他に人は住んでいるかい？」

「人はここからだど遠いのだー。妖精ならすぐ近くに住んでるけど。」

「妖精!？」

「おにいさん妖精を見た事ないの？」

「無いです」

「へー、じゃあ外から来たのかー。まあなんかかわいそうな人っぽいし、連れてってあげるのだー。」

なんという幸運だ。うまくいけば今日中にも出られるだろう。

・・・いや待てよ！俺記憶喪失じゃん！この先どうするんだよ！

そもそも名乗る名前が無いって言うのも不便だな・・・思い出せるのかな？

そういえば、外から来たってどういう事だろう？

というかそもそもこの子はなんで俺の隣にいたんだろう？

・・・まあ出れるならいいや。

く数十分後く

「着いたのかー。」

そういつてルーミアは湖を指差した。そこは春だというのに、氷が張っているのだ。どういいう事だ？

「なあルーミアちゃん、なんでここ」「ルーーーーーミアーーーー!!!」

水色が俺の目の前をかすめて飛んできた。・・・あれ？飛んできた？つていいうか飛んでる？

「チルノー！なんかかわいそうな人間が来たいつていつたから連れてきたのだー！」

「最強のあたいに会いに来たかったのね！」

「え・・・？あの、なんで飛んでるの・・・？」

俺には理解できなかつた。少女が空を飛んでいるという光景が。

また、少女の周りに浮かんでいる氷も頭を混乱させた。

「あ！あたい分かつたわ！お兄さんガイライジンでしょ！」

「外来人・・・？」

「そんな事もわからないなんて、バツカじゃないのー！」

チルノは楽しそうに笑うが俺の頭は疑問しかない。

というより色々な事が起こりすぎて混乱している。とりあえず整理だ・・・

・なんでチルノは飛んでいるの？

・外来人ってなに？

・この辺りに人間は住んでる？

・おうちにかえる方法教えて下さい

もう何がなんだかわからないよ・・・

「とりえず・・・はじめまして、チルノ。」

「この人は名前を忘れちゃったのだー。」

「しんじられないー！名前も忘れちゃうなんてよっぽどおバカさんのね！」

「・・・もういいや、早速だけど、ここから出る方法は知ってる？」

「ここって、幻想郷から？・・・知らない。」

幻想郷？地名か？

「チルノはなんで飛べるの？」

「そんなのあたいが最強だからに決まってるじゃない！」

おいおい、答えになってないぞ・・・

「・・・じゃあ、外来人って何？」

「あたかもよく分からない！でも、外から来た人っていうのは分かるよ！」

そんなの俺でも分かるわ！文字見ろ文字！

「この辺りに人間は住んでる？」

「ちよつと遠くだけど住んでるわよ、アリスって人。」

キターーーー！これで帰れる！

「そこまでのくらい時間かかる？」

「歩いたら半日はかかるわね！飛んだらすぐだけど！地図書いてあげるわ！」

「本当か!?ありがとう！助かるよ！」

もうこの際、妖精とか飛べるとかそういう事は気にしない事にした。一々考えてたら俺の頭が持たない。

きつと森の妖精が住む来てはいけけない深くまで来てしまったんだろう。人間の住む場所まで行けば全てが元通りだ。

親切に地図まで書いてくれるというし。

「はい！書けたわ！」

「本当にありがとう！これで帰れるよ！」

「ばいばいーいー！」

計画通り。



あのチルノとかいう不思議生命体は帰宅に重要な鍵を渡してくれた。これでもうこんな森とはおさらばだ。明日からバラ色文化生活が送れるぜ。

地図を頼りに10時間ほど歩いた。もう無理だ。歩けない。まじで半日かかるとは思わなんだ。

足が棒になるとはよく言ったものだ。今日はここらで寝るとするか・・・  
そう思った矢先、目の前に家が現れた。洋風な、暖かそうな家。

間違いない、アリスという人の家だ！

喜びに満ち溢れ、疲れも忘れ早速名前を呼ぶ。

「アリスさん、いらっしやいますかー！」

そう叫ぶと、中からはーい、と声が聞こえてきた。私は神に感謝した。全てが順調に進んでいる！

ガチャツ、とドアが空いた。

目の前に現れたのは、宙に浮きこちらを見つめる人形だった。

俺は気絶し卒倒した。

## 幻想の里

気持ちいいエンジン音が鳴り響く。コースは直進のみだ。

速度は200キロを超える。加速は止まらない。

アクセルをかけようとする、コースが途切れた。

ブレーキが効かない。真つ黒な空間に吸い込まれるように走り続ける。

そしてついに地面が無くなり・・・

「うわあああああああ!!!」ガバッ

気がつく、俺は布団の上にいる。

と言うことは、今までのことは全部夢だったのか!?

しかし、辺りを見ると見慣れない部屋が広がる。

どうやら見知らぬ土地に来たのは夢ではなかったようだ・・・

「あら、お目覚め?」

ドアから入ってきたのは、何とも美しい女性だった。

整った顔つきに、淡い青の服。

金髪がなびき、黄色がかり透き通るような目を持つ彼女はまさに人形のようだった。

「えーつと、あなたは、アリスさん？」

「ええ。私がアリス・マーガトロイドよ。アリスでいいわ。あなた玄関先で気絶してたのよ？」

そうだった。たしか俺はアリス宅を訪ねて、名前を呼んだら、空飛ぶ人形があつて：も、もしかしてここにも妖精が・・・？

「見慣れない顔ね、外来人かしら？あなた、名前は？」

「ああ、それが・・・」カクカクシカジカ

「・・・冗談で言ってるんじゃないわよね？」

「本当です・・・信じてください・・・」

「まあいいわ。迷った外来人は放っておけないから。今日は泊まっていきなさい。」

「本当に!?!いいんですか!?!」

「ええ。こんな事なら前例はいくらでもあるわ。記憶喪失してる人は初めて見るけど。」

この美人は見知らぬ俺をひと晩泊めてくれると言う。ありがてえ・・・!!

しかし疑問点はまだたくさん残っている。この人なら分かるかな・・・

〈数十分後〉

アリスは物知りだった。物知りが故に、俺は理解できなかった。

アリスによると、ここは幻想郷と言う、魔法や奇術の蔓延る土地らしい。アリスも魔法使いだとか。

これだけでも理解しがたいのに、ここにはなんと妖怪や鬼が住むという。なんと人を食べるのもいるそう。コワイ!

そしてこの場所から出るには単独では不可能で、紫という人物の力を借りないと脱出は出来ないと言う。

・・・展開が急すぎて頭がはち切れそうです。

「そういえばあなた。どうやって此処まで来たの?」

「ああ。確かルーミアとチルノとかいう妖精?に教えられて・・・」

「・・・それが本当なら、あなた、良く生き延びれたわね。」

「え?」

「ルーミアは食人妖怪よ。しかもかなりのの。」

「食人妖怪!?　・・・人を食べるって事ですか?」

「そう言う事。人間と交流するなんて、眉唾物だわ。」

「え・・・でも、何か普通に案内してくれましたけど・・・」

確かにルーミアは少し変人だったが、俺を食べようとする様子は無かった。

．．．うん？たしかアイツ食べれなかったとか言ってたな．．．

「まあ、生きてるならいいの。あの子も気まぐれな所あるし。」

「所で、紫と言うのは？」

「え？あなた幻想郷に入るとき、彼女を見なかった？」

「ええ。何分空からダイブして気づいたら森の中だったもんで。」

「．．．待つて、空からつて、どういう意味？」

「バイクで崖から飛び降りたんです。何とか生きてましたけどね。」

「つまり、幻想郷の上から降ってきたと？」

「そうじゃないですかねえ。」

「．．．分かったわ。取り敢えず、ご飯でもどう？お腹すいてるでしょう。」

「あ、じゃあお言葉に甘えて．．．」

「うめええええええ!!」

「あら。そう言ってくれると嬉しいわ。」

アリスは物凄く料理上手だった。

メニューは焼き魚に肉じゃが、味噌汁に白米という何ともシンプルな和食だった。

しかし嘔む度に溢れる旨味。濃厚な香り。それは空腹と調和し最高の料理へと昇華

させる。

うめえっす！とまんねっす！

「そんなにかつついても料理は逃げないわよ？」

「グス・・・俺あこんなうめえ料理を食ったのは始めてだあ・・・」

「ち、ちよつと!?!泣くほど!?!」

「アリスは将来いいお嫁さんになるよ・・・」

「・・・あなたも変わった人ね。変人と言った方がいいかしら。」

「ちよつと酷すぎないですか・・・」

く数十分後く

「ごちそうさま!」

「お粗末様。身の回りの世話はこの子がやってくれるから。」

「シャンハイ!」

それは俺が最初に見た、空飛ぶ人形であった。

自立思考があるように伺える。これが魔法なのか。どう見てもポルターガイストです。ありがとうございました。

「大抵の事ならやってくれるけど。あんまり変なことさせないでね?」

「しませんよ……」

「布団は敷いておいたから。明日には出れるように手配しておくわ。」

「ほんと何から何まで……ありがとうございます!」

「礼には及ばないわ。……今日は、早めに寝ておきなさい。」

俺は布団の中で考えた。恐ろしく事が上手く運んでいる。

まず食人であるルーミアが俺を食べなかつた。これはどういう事だろう。

アリスは嘘をつくような人ではなさそうだし。

……まあ明日には出れるらしい。それだけで十分だ。

いくら魔法があると言ったって食人妖怪と住むなんて御免だ。大体俺魔法使えないし。

命があるうちに帰るのが得策だろう。ようやく帰れる!

↳その頃アリスの部屋↳

「さて……面倒な事になったわね。まさか空からとは……」

「まあ、何かあったらアイツの責任って事にしましょうか。」

「それにしても彼……帰れるのかしら？」



## 出れない箱庭

「・・・つまり、博麗大結界に欠陥があったと？」

「そういうことになるわね。」

「分かったわ・・・博麗の巫女には私からよく、言っておく」

「彼は？」

「・・・今日の昼にも、2人でお伺いするわ。」

「わかりました。・・・よろしく、お願いします」

「シャンハイ！」

人形の声によつて起こされる。変なことにはもう慣れた。

それより、今日はここから出れるのだ！

帰ったら何しようかな？とりあえず、文明機器を使いたい・・・

あつ、バイクないじゃん。はははは。いやーどうしよう。

名前も分からないし、いつそ改名しようかな？

1からやり直す人生も楽しそうだな。

食卓には既に朝食ができていた。

しかしアリスがいない。どこかに出かけたのだろうか。

人形が食べるという素振りをするので、頂くことにする。

やはり美味である。毎日食べられたらいいのに。

ちょうど食べ終わった頃、アリスが帰ってきた。

「おかえり。」

「ただいま。……話が付いたわ、昼にここに来るそうよ。」

「本当ですか!……お世話になりました。」

「残念ながら、まだ帰れると決まったわけじゃないわ。」

……え? どういう事だろう?

まさか帰れない? 馬鹿な、来れたんだから帰れるはずだ。

「詳しい話は本人から聞いた方がいいわ。」

「あの……俺は帰れないんですか?」

「私にはわからない。前例がないから。」

心の中で何か嫌な予感がする。

〈数時間後〉

「そろそろね。来るわよ。」

「え？」

何が、と思つたのもつかの間、目の前に表現しがたい黒い空間が突如出現した。

そしてその中から、二人の少女が出てきた。

どうなつてるんだ、この里は・・・？

一人は赤と白の、奇抜な巫女のような格好をした少女。

もう一人は背の高い、何故か威圧感を感じる少女。

「待たせたわね。・・・この方が、例の外来人？」

「ええ。」

「えっと・・・はじめまして・・・」

「初めまして。私は八雲 紫。隣が博麗霊夢よ。」

「よろしく。」

「早速だけど本題に入るわ。結論から言うと、あなたは帰れない。」

「なっ!?!」

紫という少女の口から告げられる衝撃の事実。帰れない!?!そんなバカな!

「ち、ちよつと待て!説明してくれ!何でだよ!?!」

「それは霊夢が話すわ。ほら、ちゃんと説明してあげなさい」

霊夢は不機嫌そうに、だがどこか悲しい表情で説明を始めた。

説明は10分ほど続いたが要約するとこういうことである。

・幻想郷は外から干渉ができないよう博麗大結界という結界を張っていた。管理者は霊夢である。

・通常外から人間が入る場合は紫の行為による物である。

・結界は整備をしていたが、人間が入れないような場所は整備を怠っていた。

・そこで予想外にも俺が空から降ってきた為、弱まった結界は裂け俺は幻想郷内に突入した。

・正規の手段で入れれば幻想郷からは出られるが、俺は正規の手段で入らなかったためシステマ的に出られない。

・また無理やり結界を割った作用で記憶の一部が消えた。

つまり俺は本来認知できない場所に不法に入り込んだ。

それは結界の管理者である霊夢の責任。

それらの事実俺の中の何かを壊した。

そして混乱した俺は大人気なく、少女たちに向かって暴言を吐いた。

「訳わからねえよ！帰せよ！お前らのせいで俺がとぼちり食らっただけじゃねえか

「！」

「落ち着きなさい。今は感情的になるのは良くないわ」

「ならずにいるのか！ 帰れないしき！ 記憶も消えたとか！ そもそも魔法とか妖怪とか！ もう意味わかんねえよ！」

「どれだけ喚いても現実が変わらないわよ。」

「なんだてめえ偉そうに！ 元はといえぱそつちの責任だろうが！ 他人事みてえに言いやがって！」

「……仕方ないわね。霊夢、やりなさい」

「……全く情けないわ。」

そう霊夢が言った瞬間、体の身動きが取れなくなる。

誰かに操られるように頭が冷めていく。

恐ろしい現実を受け止められない俺は、年甲斐も無く涙を流していた。

「こちらの責任に関してはおまにすまないと思っているわ。でもこれは、今からどうこうして解決する問題じゃないの。」

「そんなのおかしい……非常識だ……」

「残念ながら、外の非常識は、私たちの常識なのよ。」

「……俺はこれから、どうすればいい？」

「責任もあるし、私と霊夢があなたの身の安全を確保できる場所を探すわ。人里は無理だけど。」

「本当に、ごめんなさい」

「・・・」

3人の少女は、俺をじっと見つめた。しかしそれは同情の目ではなく、哀れみの目と  
いうように感じられた。

「それじゃあ、見つかったら、また来ますから。」

「お疲れ様です。さようなら。」

黒い空間に飲み込まれる二人を横目に、俺は放心していた。

どうしてこうなった・・・？分からない。俺が悪いのか？

もう家には帰れない。二度と。

今までの話が全部冗談だったらよかったのに。

「あの・・・何と言うか、ごめんなさい」

「アリスさんが謝ることではないでしょう。」

「帰れると言ったのは私だわ。」

「……今日はもう疲れたので横になります。」

「あ……夕食は？」

「要りません。おやすみなさい」

「おやすみなさい……」

今日は食事も喉を通る気がしない。

訳のわからない土地に閉じ込められる。もう沢山だ。  
俺はこの先、どうなってしまうんだろう。

## 幻想郷で生き抜く為に

### 活路への希望

あれから3日がたった。

俺はと言うと、未だにアリス宅に居候している。

定住場所を見つけると言っていた紫と霊夢からも音沙汰無しだ。

あの件以来アリスとは殆ど話さなくなった。

元々アリスも喋らない性格のため、必要最低限の会話しかなかった。

幻想郷の事は少しずつ理解しようとしているが、すればするほど元の世界に帰りたくなる。

幻想郷は文明社会と違い、不便な事ばかりだ。

また魔法ありきの生活が多いので、自分としては非常に生きづらい。

そんなある日、アリスが珍しく話しかけてきた。

「あの、話があるんだけど」

「？」



「今夜一緒に、外に出かけない？」

「・・・どういう？」

「あなたに見せたい物があるの。」

俺はアリスが何を考えているのか分からなかった。

だが、面白いものを見れるらしいので、快く承諾した。

その夜。

「どこまで行くんだよ？」

「湖まで。少し歩くわ。」

「湖？湖に何か有るのか？」

「まあ着いてみれば分かるわよ。」

事実、幻想郷で俺は殆ど夜に外に出なかった。

虫や動物はいないが、妖怪と遭遇するのは頂けない。

だがアリスと一緒に別だ。魔法が使えるならある程度対処は可能だろう。

それにしても俺に見せたいものって・・・？

「もうすぐよ。・・・ハイ。」

俺は目を疑った。そこには信じ難い景色があつた。

広く開いた湖に月光が降り注ぎ、周りの木々に反射する。

心地よい風が吹き抜け、湖は輝いて見えた。

その光景は元の世界では絶対に見られないであろう。

まさに、「幻想」と呼ぶべき美しさであつた。

「綺麗でしよう?」

「信じられない・・・こんな光景が見れるなんて・・・」

「・・・話があるわ。」

「・・・何だよ」

「確かに、幻想郷は外ほどの文明は無いわ。外から来る人なら不便だと思ふのは当然だし、理不尽かもしれない。」

俺の心は見透かされていたのか・・・

「でも・・・でも、幻想郷の生活も・・・悪くないと、思うわよ?」

その通りだ。俺は元々ここを不便な場所だと感じていた。

結界の件もあり、幻想郷に対して所謂偏見をもっていたかもしれない。

でも今、この光景を見て、少なくとも悪い場所ではないように感じた。

「そうだよなあ・・・」

しかし、一つだけ疑問があった。

「アリスは、さ。」

「何?」

「どうして、こんなに俺に優しくしてくれるんだ?」

アリスの励ましは心の大きな支えとなった。

しかしそれだけに、この事だけは聞いておきたかった。

「・・・私に、似ていたからよ。」

「??でも俺は普通の人間だけど?」

「昔の私に。あまり遅くなるといけないわ、帰りましょう。」

「・・・??」

結局のところよくわからなかった。

でも幻想郷での生活も悪くないと、俺は思うようになった。

翌日。来るべき日がやって来た。

「久しぶり。場所が見つかったから、お邪魔しに来たわ。」

「ありがとう!よろしく頼むよ。」

俺は笑顔で言った。

今の俺なら、どんな所でも生きて行ける！そんな気がした。

「吹っ切れたようね。それと、訳ありになってしまっただけいいかしら？」

勿論だ、と俺は快く承諾した。

「では連れていくわね・・・その前に、お別れの言葉くらい言っておきなさい。」

そうだった。アリスには散々お世話になった。

「アリス、本当に今までありがとう！また会いに来るよ！」

「元気になったようで良かったわ。待つてるわね。」

「フフフ・・・それじゃあ、行きましょつか。」

そう言うとき紫と俺は、黒い空間に飲み込まれた。

中では目のようなものがうようよと漂っている。

「そういえば、これは何なんだ？」

「これは空間の裂け目。スキマと呼んでいるけど。」

やっぱり紫も妖怪なんだな。流石にもう驚かないが。

もしかしてまともな人間って居ないのか・・・？

そうこう考えるうちに、一瞬で着いてしまった。

目の前には、非常に大きい……例えれば城のような建物が構えていた。

「ここがこれからあなたがお世話になる場所、紅魔館よ。」

「……マジですか……」

「あら、ご不満？」

「そんな事はない。しかしこんなデカイ建物があるなんて……」

「中はおつと大きいわよ。じゃあ私はこれで。」

「お、おい！もう帰るのか？」

「私寝てないのよ……中に入るのも、面倒になりそうだし。」

「……そうか、ありがとうな！」

「それはお互い様。せいぜい頑張りなさい。」

そう言うのと紫はスキマへと消えていった。

男は歩き出す。吸血鬼の館、紅魔館へと。

……これから起こる災難も知らずに。

## 弦月 降

前日、紅魔館にて

「お邪魔しまーす♪」

「・・・スキマ妖怪が、何しに来た？」

「あらあら、歓迎ぐらいしてくれてもいいじゃない。吸血鬼さん？」

「わざわざ訪ねてくるなんて、異変でも起きたのかしら？」

「違うわよ・・・ある提案をしに来たの。」

「詳しく話さない。胡散臭いわよ。」

「・・・貴女、人間に興味ない？」

「人間ならうちにも2人いるわよ？」

「あの人は規格外でしょ。なんの変哲もない、ただの人間。」

「興味ないわ。帰ってちょうだい」

「まあまあ、詳しくって言ったのはあなたじゃない？」

「・・・何が言いたい？」

「不法侵入者で、記憶喪失の人間は欲しくない？」

「・・・まさかと思うが、あの博麗大結界が破られたの？」

「そのまさかよ。彼が破つたの。これは紛れもない真実。」

「!？」

「フフフ、フランちゃんのいい遊び相手にもなるんじゃないかしら？」

「・・・だからどうした。アイツの遊び相手なら咲夜がいる。メリツトが無い」

「どうかしら？彼、名前もないようだし、とつても教育しがいがあると思うけど。」

「・・・仕方ないわね。今回だけは貴女に乗ってあげる。感謝しなさいよ？」

レミリアがニヤリと笑う。

「契約成立ね。」

「お嬢様!?!そいつは!?!」

時を止めていた咲夜がいきなり現れる。

「あらあら、見つかつちやつた。それではよろしく頼むわね？」

「クツ・・・又しても、あのスキマ妖怪め・・・!!」

「咲夜、喜びなさい。・・・新しい人間が来るわよ。とびきり育てがいのあるのが。」

よし。心の準備は出来た。第一印象は礼儀正しく・・・

ん、？あれは・・・

「あの・・・紅魔館の方ですか？」

門の横で寝ている女性に話しかけると、バツと飛び起きる。

「ひやつ!!?　・・・私は紅魔館の門番! 貴様何者だ!？」

「やつぱり。外人人ですけど、お話聞いてません？」

「・・・あー! 昨日言つてた、名前のない方ですか!？」

「お恥ずかしながら。」

「聞いてますよ! 早速中へどうぞ! お嬢様がお待ちです!」

「お邪魔します。」

お嬢様? この館の主は女なのか?

というか、幻想郷に来て一人も男を見てない気がする・・・

「お嬢様、例の外来人を連れてまいりました」

「入りなさい」

「失礼します・・・」

ガチャつとドアが開く。主はどんな人だろうか? やつぱ貫禄がありそうだなあ・・・

そう思つて部屋に入ると、そこには・・・小学1年生くらいの少女が座っていた。

これが主? まさか・・・



「初めまして。私がこの館の主、レミリア・スカーレットよ。」

「・・・失礼ですが、貴女がですか？」

「何よ？私が務めちゃいけないの？」

「えっいや・・・えっ!?」

「貴方、随分と失礼なのね。これから仕える主だというのに。」

仕える!?何を言っているんだ!?

「えーつと・・・申しわけありません。何も聞いていない物で・・・」

「ハア・・・これだからスキマ妖怪は・・・いい?よく聞きなさい。これから貴方は紅魔館のメイドとして働くのよ?」

「ええ!?!」

「・・・あなた名前が無いんでしょう?私が名付けてあげるわ。」

「今日から貴方の名は・・・空から降ってきたのだから、弦月《げんげつ》降《こう》でどうかしら?」

俺は驚愕した。紫にハメられたのか!

まあ詳しく聞かなかった俺のミスか・・・っていかアバウトすぎるんだ。

っていうか名前付けられたぞ俺!

「いい名が付いたわね、降。咲夜!例の外来人が来たわよ!」

すると何処からともなく、銀髪の美女が現れた。彼女も妖怪なのだろうか。

「貴方の話は聞いているわ。私は十六夜 咲夜。この紅魔館のメイド長を務めています。」

「咲夜、その者は弦月 降という名前が付いたわ。みっちりと教えてあげなさい。」

「畏まりました、お嬢様。降、付いてきなさい。」

「ここが今日からあなたの住む部屋よ。自由に使いなさい。」

「えーつと、咲夜さん？色々聞きたい事があるんだが？」

「何かしら？」

「何って、俺は何も聞いていないんだけども……」

「……仕事内容はおいおい説明するわ。」

「そういう事じゃなくて。そもそも此処は何だ？」

「……本当に何も知らないのね。此処は吸血鬼、レミリアお嬢様の館、紅魔館よ。」

「本当にあの子供が!？」

「……次お嬢様の悪口を言ったら殺すわよ？」

そう言っつて咲夜はナイフを突きつける。

「スイマセン……」

こうして、俺の命懸けのメイド生活が始まるのであった。

## 幼き主

「明日の7時になったらここへ来ること。いいわね？」

咲夜はそう言うのと消えてしまった。

「紫め・・・次会ったらぶっ飛ばしてやる・・・」

そう呟いて周りを見る。

小奇麗に整った部屋。その綺麗さは逆に不信感を抱かせる。

・・・明日から忙しくなる。早めに寝よう・・・

（翌日）

「おはようございます・・・」

「おはよう。時間通りに来たわね。早速こっちへ来なさい」

「来て早々何だよ、説明くらい、くれてもいいんじゃないのか？」

「説明は不要。それとここでは敬語使いなさい、分かったわね？」

「・・・分かりました・・・」

咲夜はそう言うのと、食堂へと僕を連れていった。

中には5人の女性が座っていた。その中にはレミリアと名乗っていた主の姿もあった。

「……この方達は？」

「この館の住民。これからお世話になるんだから、挨拶しなさい」

「えーつと……私はこ「普通ね」え？」

「博麗大結界を破ったって聞いたもんだからどんな奇天烈な人が来るかと思えば、普通の人間じゃない？」

「いいじゃない、パチエ。そういう所も買ってるのよ？」

「そ、そうですよパチュリー様！普通でもいいじゃないですか！」

「……あなたの席はそこよ、降。座りなさい」

普通で何が悪いんだ……というか、おたくらが変すぎるんだろう。

そう思いながら席に着くと、なぜか食事が用意されていた。

「それでは揃った所だし、頂きましょうか」

え？何で？なんで俺と一緒に食事を……？

疑問に思っていると、みんな既に食べ始めていた。

「どうしたの？食べないのかしら？」

「あつ……頂きます。」

疑問の中食事を終わると、咲夜がついて来いという素振りを見せたのでついて行く。

「あの人たちって、幹部的な役回りの人なんですか？」

「なに言ってるの？紅魔館にはあの人達だけよ。」

「こんなに広いのに？流石に冗談ですよ、掃除もできやしない」

「本当よ。ちなみに掃除は全部私一人。」

「・・・冗談も程々にしてください。」

「いちいち疑わないでくれる？ここには外の常識は通用しないわ」

「・・・何だよ、普通の人には理解できなくていいって事かよ・・・」

「貴方は美鈴の所へ向かいなさい。門に居ると思うわ」

「ち、ちよつと？メイドの仕事は・・・」

そういいかけた頃には咲夜の姿はもう無かった。

・・・とりあえず門に行けばいいのか？

門につくと、先日と同じ人が同じ場所で眠っていた。

「あ・・・？美鈴さん・・・ですよね？」

「ヒエツ!?あつ降さん!どうしたんです!?!」

「咲夜さんから、ここに行けと言われたんですが・・・」

「ああ、そうでしたね！じゃあ早速始めましょうか」

「始めるって、何を？」

「聞いてないんですか？訓練ですよ、訓練！」

「訓練!?!」

「・・・本当に聞いてないんですね。じゃあ説明しますよ？」

美鈴というひとの説明によると、こういう事だ。

- ・メイドの仕事は時を止められる咲夜が全てやるので問題ない。
- ・これからは自分にしかできない『ある仕事』をやってもらおう。
- ・その仕事が出来くるくらいには体を鍛えておく事。

「・・・あれですね。幻想郷の人って」

「はい?」

「説明しない人多いですよね・・・」

「・・・否定はできませんねえ。」

その日から訓練は始まったが、非常にハードな物だった。

何しろ美鈴は妖怪らしく、人間用にレベルは落とされたものの、一流スポーツ選手並の練習量だった。変なマッサージのお陰で身体は壊れなかったが。

内容は主に、反射神経と体力を鍛えさせられたりした。

一体仕事とは何なんだろうか・・・

「これで今日は終わりです。お疲れ様でした」

「お、お疲れ様でした・・・」

「紅魔館はどうですか？ 楽しめそうですか？」

「いえ・・・そうでもなさそうです」

「あら、何故ですか？」

「咲夜さんは冷たいし、主は子供だし、まともに話してくれるのは美鈴さんくらいですよ。」

「ふふふ。私も最初来た時はそんな感じでしたよ。」

「美鈴さんも？ 一体どうやって慣れたんです？」

「長い間やると、分かるんですよ。お嬢様の・・・カリスマ性みたいな物が。」

「か、カリスマ・・・？」

「そろそろご飯ですよ、行きましょう？」

「は、はい・・・」

カリスマ？ あの小さな子供に？

幻想郷はやっぱりわからない事だらけだ。



「ちよつと、降?」

食事中、レミリアが話しかける

「何でしょう?」

「食事が終わつたら私の部屋に来なさい。用事があるの。必ずよ。」

「・・・?はい。」

「フフフ・・・楽しみね・・・」

一体何が楽しみなのだろう。

周りを見ると、皆何とも言えない表情を浮かべている。

食事が終わり、約束通りレミリアの部屋に来た。

その体には見合わない大きさの椅子で、レミリアはうすら笑いをしていた。

「今晚は。待つてたわよ?」

「用事とはなんですか?」

「そうね・・・単刀直入に聞くけど、貴方、性行為はした事ある?」

「・・・すいません。よく聞き取れませんでした。」

「性行為はした事ある? 何度も言わせないで頂戴。嘘をついたら許さないわよ?」

耳を疑った。なんてことを聞くんだ? この子供は。

顔色一つ変えず言い放つ様子は恐怖すら感じさせる。

嘘をつく必要は無い。のか？正直に答えた。

「ええと・・・無いです・・・」

「それを聞いて安心したわ。顔を寄せなさい？」

「!？」

「早く。レディを、待たせるつもり？」

勘違いしないで頂きたいが、私にはそういう趣味はない。

ただ、俺はそのどこか大人びた顔をした少女に、何故か逆らうことができなかつた。

透き通るような肌、何が頭に訴えかけるような目。

そうして俺は顔を近づけていつて・・・

「さて、男はどうなのかしらね？」

首筋に、熱い何かを感じた。

その瞬間。何にも例えられぬ、しかしこれ以上無いくらいの快楽を感じた。

少女に抱きつかれる。動こうとしても、体がそれを拒否する。

何が起こっているのか分からず、パニックになる。

それは数秒の出来事だったが、自分には何分、いや何時間の出来事に感じた。

「ふはっ・・・悪くないわね。」

「~~~~~!?!?」

「あら、立ってる。中々血の多い人間ね。」

「い、一体何を……」

「ちよつと血を頂いただけ。吸血鬼なんだから当然でしょ?」

レミリアはニヤリと笑う。その瞬間俺は感じてしまった。

圧倒的な力の差と、精神的余裕。

この少女には絶対に、逆らえない事を。

「ねえ。降?提案があるんだけど?」

「……?」

「貴方気に入ったわ。吸血鬼になってみない?」

「!?!」

何だ?何を言っている?

吸血鬼になる?俺が?

「手段は簡単。私が、吸血鬼の血を貴方に流し込むだけ」

「でもそれには、貴方の心身が私の血を受け入れないと意味が無いの。」

「吸血鬼になれば、今まで出来なかったことが、沢山出来るようになる。」

「ただの人間の生活なんて……つまらないと思わない?」

つまらない。面白くない。確かに俺はそれを常日頃考えていた。

そうだ。俺はいつでも、凡人凡人と見下されて来た。

ここに来てからも力の差は歴然、妖怪や魔法、理解できない物がさらに自分の立場を弱めた。

もう出れないのならいつそ身を任せて……

「そう……!!…それでいいの……身も心も、私に委ねて……」

その瞬間、部屋一杯に声が響く。

「お嬢様!!!」

「あら、覗き見? 趣味が悪いわよ? 咲夜。」

「降さん慰放して下さい!!!」

「私と降の事よ。自由にさせて頂戴?」

「お嬢様は分かっているのです! 吸血鬼になるのがどういう事か!」

「……貴方、随分と偉くなったようじゃない? 主である私に楯突くとはね。」

「例え楯突いてでも、その行為だけは見逃せません!」

「私は、この人間に吸血鬼の可能性を感じた。それを有効に使おうとしただけよ。」

「……第二の妹様を、お作りになる気ですか?」

「……私にそれを言うとはね。咲夜。」

「お許し下さい．．．ですが、それが現実です。」

「．．．分かったわ。吸血鬼になるもならないも、この人間の考えで決める。それでどうかしら？」

「．．．ありがとうございます。お嬢様。」

「この件は不問にしておくわ。早く医療室にでも連れて行ってやりなさい。」

二人の声の間で、俺は静かに気を失った。

## 無邪気な吸血鬼

「目が覚めた？」

咲夜が話しかける。外はもう明るい。

「ああ、すいません・・・大丈夫です」

「何が大丈夫よ。三日も寝てたくせに。」

三日も気絶していたのか。・・・その時の事をぼんやりと思い出す。そうだった、確か俺は血を吸われて・・・

「魅了の呪いに掛かっていたのよ？お嬢様のね。」

「何と言うか・・・ありがとう。」

「お礼はいらないわ。大変なのはここからよ」

「？」

「・・・外で美鈴が怒ってたわよ？仕上げがまだなのにー、って。」

「あつ！すいません！すぐ行きます！」

急いで駆け出す。後ろで何が聞こえた気がした。

「もー！心配したんですよー!!?このまま死んじゃうんじゃないかって!」

「ご心配をおかけしました・・・」

「まあ今日は最後のテストと行きますか。」

「テスト?、なんの?」

「今から私と、本気で闘っていただきます。」

「ええ!?ムリですよ!病み上がりなのに!」

「大丈夫、病み上がりが一番力ですよ!」

「そ、そういうもんですか!?!」

「では十分耐えられたら合格です!いきますよ!」

その瞬間左アッパーが飛んでくる!慌てて後ろに回避。

ストリートは受け流し。ジャブはたたき落とし。あれ?意外と簡単・・・?

「中々様になつてるじゃないですか!じゃあ本気で行きますよ!」

全ての行動が格段に早くなり、攻撃のキレも増した。

でもやる事は変わらない。相手の動きに全神経を集中させる。

作業のように迫る四岐を躲していく。

「十分経過です!お疲れ様でした!」

「ゼエ・・・ゼエ・・・」

終わった頃には体力はすでに消耗しきり、意識も朦朧としていた。

これほど体を酷使する仕事って何だよ……

「今日はゆっくり休んでください。それから早速仕事です」

「あの、仕事とは一体……」

「それは今夜、お嬢様から直に説明があるかと。」

またあの人の所へ行くのか……不安だ……

「そうですか。ありがとうございます。」

「……大変なのはこれからです。気を引き締めて。」

「?……分かりました」

あれ?このセリフ、デジャヴ……

そう思いながら部屋へと歩き出す。

「……どうか、死なないで下さいね。」

その夜、レミリアから直々に指名があった。

今回は咲夜が安全のためと言って付いてきた。

「よく来たわね。降。まあ、座りなさい。お茶でもいかが?」



「頂きます。」

そう言つてグラスに手を伸ばすと、ナイフが飛んできて割れる。

「!？」

「あら残念。よく分かつたわね、咲夜？」

「痺れ薬を面白半分でするのは良くないですよ？お嬢様。」

あ、危なかつた・・・

「それで、仕事の事なんだけど・・・」

「はい。」

「私の妹の『遊び相手』になつてもらうわ。」

「・・・は？」

思わず唾然とする。

妹の遊び相手？そのためにあんなハード特訓を!?

というか妹なんて見たことない・・・

「詳しい説明は咲夜から。仕事は明日からよ。」

「はい。・・・付いてきて。」

翌日。

「妹なんて、居たんですか？」

「ええ。厳密に言えば、義妹なんだけど。」

「義妹??」

「妹様、フランドール・スカーレットは、レミア様のお父様が人工的に作り出した吸血鬼。」

「い、いいのかよそれ……」

「当時は吸血鬼が幻想郷を支配していたから。」

いくらなんでも、そんなこととしていいのか。

吸血鬼には命のモラルもないのか？

圧倒的な力という物が嫌いな俺は嫌悪感を感じる。

「……着いたわ。私も行くけど、くれぐれも無茶はしないように。」

「?分かりました。」

「それと、これを飲んで。」

そういつて赤い色の小瓶を取り出す。

「何ですかこれ？」

「……体の緊張をほぐす薬と言えば、分かり易いかしら。」

それを怪しみながらも飲み干す。

体が少し軽くなったが、得体のしれない不安定を感じた。

「フラン様。入ります」

そう言つて、がちやりとドアを開ける。

中は女の子らしくも、何故か血なまぐさい部屋。

注意して見ると裂けたぬいぐるみや、体の折れた人形が所々に散らばる。

それにしても、なんでこんな地下に……？

「咲夜！隣の人とは？」

フランドールは、レミリアと同じくらいの少女だった。

濃黄色の髪を横に束ねた姿が特徴的であった。

「フラン様。これは弦月 降。先日お話しした『普通の人間』でございます」

「へー！これが普通の人間なんだ！初めて見た！すごい！」

「……ええ、と、弦月降です。宜しくね。」

「よろしく！じゃあ早速……」

そう言つとフランは、俺に手をかざした。

その瞬間体が何かに観察されているような感じがする。

「あれー？……咲夜！もしかして普通の人間って『目』がないの!？」

「・・・はい。」

目!?目ってなんだ!?!目ならあるぞ!?

「すごい!すごいよ咲夜!それじゃ簡単に壊れないんだね!」

「・・・くれぐれも乱暴な扱いは控えてくださいね。それは私達の、『大切な物』です」

「ちえー、はい」

何の話か理解できなかった。

壊れる?乱暴な扱い?俺の?

「ねえ人間!降だっけ?何して遊ぶの?」

「え、えつと・・・」

その日俺とフランは、普通の人間が遊ぶように遊んだ。

フランはレミリアと違い、無邪気で活発な吸血鬼だった。

特訓の意味を疑問に思いつつも、フランの笑顔を見ると、何故かこっちまで楽しくなる。

咲夜はそれを何が言いたげな顔で見守っていた。

「それじゃあそろそろ・・・」

「えー!もう帰るの!?!いやだ!?!」

「フラン様。人間は脆いのです。夜は寝ないと壊れてしまいます」

「ぶー．．．また明日も来てね？」

「もちろん。また明日も来るよ！」

その日の夕食。

「降。フランに会ったんでしよう？」

レミリアが唐突に話しかける。

「ええ、まあ．．．」

「感想は？」

「普通の女の子って、感じでしたね。吸血鬼とは思えませんでした。」

「そう．．．まあすぐに、分かるわよ。」

「．．．？」

「それと、どうかしら？あの、答えは。」

「あのつて、何でしょう．．．？」

「吸血鬼になるつて話。明日にでも結論を出して頂戴」

そうだった。一連の出来事で、すっかり忘れていた。

咲夜は何とも言えない表情を浮かべている。

今考えても、吸血鬼も悪くないか．．．な？

そう思ったとき。

「・・・弦月降。」

「は、はい？」

紫の髪をした女性が、初めて話しかけてくる。

確かパチュリーだったっけ・・・？

「食事が終わったら、図書館に来なさい。いいわね。」

「？は、はい・・・。」

この館は食事の時に人を呼ぶのが流行ってるのか・・・？

「お邪魔します。」

図書館に入ると、赤い髪をした女性が待っていた。

「今晚は。パチュリー様がお待ちです、どうぞ」

「あら、来たわね。」

「こ、こんばんは・・・何かあるんですか？」

「大したことじゃないわ。これを、貴方に見せたくて。寝る前にも読みなさい」

そう言ううとパチュリーは、一冊の本を私に手渡した。

表紙には「吸血鬼とその歴史」と書いてある

「あの、これは・・・？」

「用事は終わったわ。早く出ていきなさい」

「え!?!」

「出口までお連れします」

「ち、ちよつと・・・!」

半ば強制的に外に出される。

この館の人は本当に分からないな・・・。

その夜、俺はパチュリーから貸してもらった本を読んでいた。

そして、信じられない項目を発見する。

「これって、もしかして・・・!?!」

## 最悪の館

幻想郷に、一人の人間の女の子が迷い込みました。

その女の子は、当時幻想郷を支配していた吸血鬼の王に見つかってしまいました。

しかしその女の子に才能を見た王は、禁じられた行為、人間を吸血鬼にしてしまします。

吸血鬼になり、狂ったのか女の子は、その晩一日で吸血鬼一族を半壊させました。

王をも壊したその女の子は、次々と周りを壊していきます。

しかし王の子であったレミリア・スカーレットだけは、殺せずに眠ってしまいました。力を恐れた生き残りは、その女の子と姉を館に置いて、どこかへ去っていきました。

女の子の名は、フランドール・スカーレット。今もどこかで生きていると言われています。

—吸血鬼とその歴史　より

先日、咲夜はこう言っていた。



「妹様は、少々、気が触れているので。」

「気が触れている?」

「ええ。なので地下に封印施設があるのです。お嬢様がいつていたのはそう言う事ですよ。」

その時俺はこう思った。幻想郷だから普通なんだろう、と。

凡人だから、理解できなくても仕方ない、と。

だがそれは違った。例え凡人でも、理解しなくてはいけない事があった。

「降! 今日は何する?」

「今日は、フランに聞きたいことがあるんだ」

どうしても確かめたい事があった。

これさえ分かれば全て終わりだ。

「何?」

「君が… その、気が触れているというのは、本当の事かい?」

「… どういう意味?」

「頼む… 教えてくれ」

「…… 教えてあげる」

その時フランはこう伝えた。

自分は本当は狂ってなどいない。狂ったふりをしている。

ただ、そうするとレミリアが、館の皆が楽しんでくれる。

だから500年たった今も、こうして狂っているんだと。

俺にそれを疑う余地は無い。

何故なら彼女はただ、今にも泣きそうので、純粋な眼差しを向けていたから。

「フランはそれでいいのか!？」

「いいよ。お姉さま達が喜んでるのなら、それで。この事は誰にも内緒だよ?」

紅魔館が少女6人だけの場所だと知った時から、気づくべきだった。

ある事を確信した俺はその日館を抜け出し、走り、走り続けた。

つまりこういう事だ。

フランは狂ってなどいなかった。ただ突然の力に戸惑いながら、気がつけば一族を滅ぼしていた。そして幽閉される。

フランより早く物心ついたレミリアは力に物を言わせ、幻想郷で優秀なコマを集め、紅魔館の中で「おままごと」を始める。

コマ達は皆それを甘んじて受け入れた。あろう事か、幻想郷の住民さえも。レミリアはフランの過去をほじくり返ししながら、「おままごと」を楽しんだ。そして俺もまた、そのコマとなろうとしていたという訳だ。

「どこへ行くつもり？」

目の前に咲夜が現れる。

「・・・放っておいてくれないか」

「何を知ったか知らないけど、突然いなくなるのも困るのよ。主にお嬢様が、ね」

「そうやってお嬢様お嬢様って！自分の感情はねえのかよ!？」

「私はお嬢様に救われた。名前だって付けてもらったわ。一生をお嬢様に尽くすつもりよ」

平然とした顔で答える。

「俺も同じだった。ただ、お前と違ってあんな狂った場所にしようとは思えないがな」

「・・・お嬢様はきつと貴方を捕まえに来る。殺すかもね。それでも？」

「凡人だからこそ言えることがある。お前から最高にクズだ」

「残念ね。」

自分の腕に激痛を感じる。

「つつ…！」

「お嬢様を馬鹿にしたら殺す。言ったはずよ。」

「…気が触れているのは、あんたらだったな」

痛みを我慢し、最後の意地を張る。これで終わりだ。

短かったな、俺の人生。

「お嬢様には、始末したと伝えておくわ」

「…?!」

「もう会うことはないといいわね。さよなら」

そう言うと、また彼女は消え去った。

ただ哑然とする俺を残して。

「…分かってるわよ、私だって…」

あれから数ヶ月。

腹の傷も何とか塞がった俺は、全てを諦め、幻想郷で再びサバイバルをしていた。幸い刺さったナイフのお陰か、初日の物よりは随分と効率的になっていた。今ではすっかり慣れた。

そこは幻想郷の中でもかなりの僻地らしく、妖怪も人間も滅多に來ない。勿論吸血鬼も。

身を隠すには絶好の場所だ。

生きるために時間を送る日々が続く。

そんな中で俺は一つの答えを見つけていた。

「幻想郷に俺の居場所は無い」

幻想郷で生き抜く為に、男は今日も動き出す。

## 幻想郷を楽しむ為に

### 第三の人生

朝の光を浴びて起床。

川で体を洗った後、木の実や果物、野菜の朝食を取る。

その後は手製の石斧で木材を採取。

一仕事終わった後は山菜などを摘みに行き昼食。

帰れば薪割りや道具作りに勤しみ、

夕飯は昼の残りをじっくり調理。

日が沈めば寝る。

これが俺の一日の生活だ。これを数年続けている。第三の人生だ。

まるで原始人だ。文化人にとって想像もできないだろう。しかし充実している。

そんなある日の出来事だった。

「お久しぶり。お元気？」

頭の上から懐かしい、聞いたことのある声がある。紫だ。

紫だ。嫌な思い出しかない。主にいろんなトラブルの原因だ。

会った瞬間から俺は何かを諦めた。

「・・・今更何の用だ？もうあれから何年経ったよ」

「あら、以外ね。見るなり怒って殴りかかると思ったけど。」

「そんな事しねえよ。もう前の事は全て忘れる事にしたんだ」

「それを聞いて安心したわ。それで、こんな野蛮な生活を？」

「野蛮か・・・ハハハ！」

野蛮という言葉に思わず笑ってしまふ。

「何よ、随分楽しそうじゃない？」

「いや。俺にはお前ら妖怪の方がよっぽど野蛮に見えるからな！」

「・・・貴方って、普通の人間だと思ってたけど。変人になったのね」

紫が呆れ顔でこちらを見る。

「それもおあいこさ。用が無いなら帰ってほしい。あまり妖怪と関わりたくはないんでな」

「霊夢が貴方に会いたがってる。行ってあげてくれないかしら？」

そんな事だろうと思つた。

「・・・断る。俺は誰にも会いたくない。それにあいつも、俺のこんな姿を見てどう思う

かな。」

「それもそうね。ま、無理にでも行ってもらうけど。」

「それ来た。お前ら妖怪はいつもこうだ」

「喧しいわね。飛ばすわよ」

次の瞬間俺は地面のスキマに飲み込まれ、博麗神社に腰から落ちた。

「いてて・・・もうちよつとマシな運び方があったろうに。」

「雑で悪かったわね。」

「あ、あなた・・・」

それは紛れも無く、自分をこの世界に閉じ込めた原因、博麗霊夢だった。

「・・・久しぶりだな。元気だったか？」

「・・・ごめんなさい」

「何だよいきなり。」

「あなたがそんな姿をしているのも私のせいよ。まずはこれを言いたいと思って。」

「今更気にすんな。くよくよしてると入る賽銭も入らねえぞ？」

「・・・冗談飛ばせる位元気になったならそれでいいわ」

「だそうだ紫。そろそろ帰してくれ」

「あら、帰れないわよ？」



「・・・は？」

まじかよ。ついに幻想郷の中でもそれを言うか。

「あんな僻地にいたんだもの。私だってあんな所知らないわよ」

「おいおい待てよ。じゃあ俺はどうすんだっての」

「神社にでも泊めてもらいなさいな」

「え!?!うちに!?!」

霊夢が呆気に取られたような表情を見せる。

「ほら、霊夢もあんな顔してるぞ？」

「知らないわよ。それに幻想郷に原始人がいると、私もいい気分じゃないのよ」

「何でだよ」

「なんだか疎外してるみたいじゃない。イメージも悪いわ」

「全くお前ら妖怪は、迷惑しか掛けれねえのか？」

「悪かったわね。じゃあ、頑張りなさいよ」

「おいおい！ホントに帰れねえのかよ！」

「たまに様子見に来るから、精々死なないように。」

そう笑いながらスキマへと消えていく紫。

残される二人。

「・・・何だ、その、これからよろしく・・・。」

「あ、はい・・・。」

こうして男と巫女の、奇妙な共同生活が始まる。

「あー。久々に文化な生活してるわー。」

洗面台で色々やり終えた。3年ぶりの剃鬚に気分も爽快だ。

「おっさん臭くなってるわね。最初の若々しい青年はどこに行ったのかしら」

先ほどあった時とはまるで違う口調を聞かせる。

過去の事は全て無い事に、といたらこうなった。

まあこっちの方が俺は俺で気が楽なんだが。

「やかましいやい。こっちのカミソリってのは質が悪りいな、剃つても残っちゃう」

「ヒゲの方が似合ってるわよ。そういうえば、名前はまだついてないの？」

「・・・」

(確か弦月 降だったか？だがあの名前使うのもな・・・)

「いや。まだ名無しだな」

「そう。じゃあ名づけてあげるわよ」

「お、嬉しいね。イカした名前にしてくれよ」

「うん。原<sup>ゲン</sup>でどうかしら？」

「それは俺が原始人だったからか？だとしたらかなりの安直さだな。」

「悪いけどひねりのあるネーミングは苦手なのよ。」

「ゲンか。まああり難く使わせて貰うよ。名乗る相手がいるかは分からんが。」

「・・・あなたもしかして一生出ないつもり？」

「妖怪のせいで俺の人生振り回されっぱなしだからな。サバイバルに学んだ事だ」

「原始人返りなのによくもそうペラペラと喋れるわね。」

「元々こんなもんなんですね。・・・聞きたいんだが、今あれから何年経った？」

「え？・・・3年かしら。」

「なんてこった・・・」

「何よ、不都合があるの？」

「もう俺30手前じゃん・・・」

「・・・ご愁傷様。」

「あー布団きもちいー！」

「これが文明の力よ。恐れ入ったかしら？」

「流石だな。目覚めが違う。草と土とは大違いだ」

「じゃあ私は散歩に出かけるから。留守番お願いね」

「あ、待った。俺も行く」

霊夢が驚いた表情を見せる。

「・・・妖怪に会いたくないって、つい3日前に言ったんじやなくて？」

「いやー、身なりを整えるとつい見せたくなくなつてな。」

「そういえば髪も切つたのね」

「ダンディに決めようと思つてね。似合つてるかい？」

「どつちかと言えばワイルドね。似合つてなくはないわ」

「切つたのお前だけだな。という訳で、よろしく頼む。」

「あら、霊夢じゃない。おはよう」

「おはようアリス。」

「隣の方は？」

「おいおい忘れたのか!?!俺だよ俺!」

「俺俺詐欺かっつての。3年前にいた記憶喪失の人よ。」

名前が無かったんだからしょうがないだろうが。

「え!?!・・・なんと言うか、その」

アリスが何か言いづらそうな表情を浮かべる。

「何言っても怒らんから言ってみ」

「その・・・おっさん臭く、なったわね。」

「お前までそれかい。おっさん傷ついちゃう」

「好青年に戻ってくれないかしら？」

「悪いが俺は過去に囚われない男になっただんだ!」

ドヤ顔で言い放つ。

アリスは若干引き気味である。

「原<sup>ゲン</sup>って名前がついたの。私がつけたのよ」

「何だか妙にマッチした名前ね・・・」

「それは褒めてるのか貶してるのか？」

「褒めてるのよ、良かったら中でお茶でもどうぞ？」

「酷いねえ。頂くよ」

「お邪魔しまーす」

「それで？詳しく話さないよ」

「何がだよ」

「3年間何してたの？」

「・・・そういえばアリスちよつと顔が大人びてきたな。そつちのほうが様になってるぞ」

「誤魔化さないで。まさか3年寄生生活って訳でもあるまいし」

うーん。困った。正直話したくないんだが。

とりあえず半分真実半分嘘で通すか。

「そうだな・・・3年間サバイバル生活してたよ」

「・・・冗談でしょ？」

「残念ながら本当だ。紫が言うには相当な僻地らしい」

「あんたも大変ねえ。」

霊夢が半笑いで言う。元はお前のせいだったの。

まあこれ言うとは色々重い空気になるからな・・・

「・・・まあいいわ、それで今は？」

「ああ。博麗神社に居候中だよ。またそっちに戻るかい？」

「遠慮するわね。」

「私も遠慮したいわ。」

「おいおい・・・いくら何でも少しは傷つくんだぞ？」

「そうは見えないけどね。」

アリスの入れた紅茶は温かく、3年前を思い出させた。

「もう帰りましょう。日が沈んじゃうわ」

今度はうまく行く。根拠は無かったが、そんな気持ちだった。

## 知らない天井

ここは博麗神社。そして寝室の奥にいるのが俺だ。

体は震え顔は真つ青、心臓はバクンバクン言っている。

「どうしてこうなった・・・」

「宴会い？」

「そう、ここで。最近皆暇なのよね」

「悪いが俺はパス。そんな妖怪が集まったら何されるかわからん」

「でしようね。寝室で寝てるといいわ」

そして4時間後。



酒に酔った誰かの大声で起床。てかこれ絶対霊夢だろ。

「では今からゲンさんかくれんぼを始めます!!!」

「!!!「イエーイ!!!」!!!」

「ルールは簡単!このどこかにいるゲンを見つけただけ!見つければなんと好きにしたいです!」

「!!!「やったー!」!!!」

「・・・は?」

そして今に至る。

「こりやまずい・・・妖怪で好きにいつたらアレだ、殺されるか食べられる・・・長年の勘かな、ハハハ笑えねえよ・・・」

「3年間永らえた命の灯火、ここで消すわけにはいかん・・・どうしたものか」

生き残る道は2つある。この場に留まるか、一番奥の物置へと身を移す。

物置までは多少距離があり、移動するのは危険かもしれない。だが行けば安全だ。

ここには隠れる場所はない。誰か来ればすぐに見つかってしまう。

(物置に向く！それしか方法はあるまい……)

ゆつくりと、周りを確認しながら、物置への道を行く。

その道は険しく、途中でする物音や得たいの知れない声にすぐに俺は精神を削がれた。

しかし物置がついに目の前に迫る！

(ゴールだ！これで生き残り確定！万歳！)

そう思った瞬間後ろから抱きつかれた。

「見つけた」

「……え？」

全身から血の気が引く。驚きすぎて心臓が止まる。

女の子に抱きつかれて嬉しいとかそういう次元じゃない。

もはや死。死が抱きついて来たのだ。

「……あの「待って」ひい。

「そうですね……黙っていてくれれば殺しはしませんよ。」

割とブラックな女の声が響く。絶対喋らない。絶対死にたくない。

「まず目を瞑つて、こつちを向いてください」  
絶対逆らわない。

「そしたらしゃがんで顔を声のする方に向けてください。」

一体何が始まるんです？ 斬首かな？

「・・・何が起きても絶対にそのままですよ」

あつこれ命に關わる奴や。残念

・・・なんか猛烈にほつぺたを揉まれてる気がする。あと腕も。何だこれ秘孔？

「なるほど・・・これが本物の人間・・・そのままですよ、そのまま」

なんと肩に乗られる。体重がモロに軽くてびっくりする。本当になんだこれ。

「このまま私を乗せて、入り口まで向かってください！ 目は開けていいですよ」

・・・本当に何を言っているんだ？

一応言われたとおりに歩き出す。顔が見たい気もしたが下手に逆らつて殺されるかもわからん

「おーい！ みんなー！ 捕まえましたよ！」

頭の上でそう声がする。入り口の広間には霊夢が座つていた

「皆ー！ 戻つてきなさーい！」

まるで訳が分からんぞ！

「あ、もういいですよ！おろしてください！」

その人は予想とは裏腹に小柄で爽やかな少女だった。声が別人だった。

「あー面白かった！あのゲンの顔！」

「まじで心臓止まるかと思っただんで止めてください！」

5人の少女が笑い出す。女だけかい。まあ妖怪ですけど

脇には10本ほどの日本酒の空瓶が転がっている。ってこいつらどんだけ飲んでんだ！？」

「やるじゃんか妖夢！まさか肩車で帰ってくるとは思わなかったぜ！」

「幽々子様ー！迫真の演技でしたよ私！」

妖夢っていうのかこの子。迫真ってレベルじゃないぞ・・・まじで死を覚悟した

「そう言えば、私とアリス以外は知らないわよね。ゲンに自己紹介よ皆！」

「私は魔理沙！よろしくな！」

「妖夢です！さつきは驚きましたー？」

「西行寺幽々子と申しますー。」

「皆さんヨロシク。じゃあ俺は寝るんで」

「いやいや、逃がさないから」

霊夢が俺の肩を掴む。怖い

「ちよつとまつて霊夢さん酔つてるっしょ」

「ゲンも飲めばいいじゃんか！」

「いや俺はここ3年酒なんて飲んでないんで・・・10分で潰れるんじゃねえかと」

「まあまあいいじゃない？たまにはこういう事もしましょうよ、」

「じゃあちよつとだけ・・・ちよつとだけだからな？」

「はいはい、お注ぎしますよ」

「ちよつと待てアリスそれ注ぎすぎ・・・」

「男なんだから！ぐいっと！」

「本当死んじゃう！やめて！」

「飲まなかったら食べちゃうかも・・・ね？妖夢」

「そうですねー！どうしようかなー！」

「あークソ・・・1回だけだからな、ホントに」

1時間後・・・

「そこで霊夢の奴が俺の指くわえて！さっぱり塩味って言ったんだよ!!」

「ギヤハハハハハ！霊夢お前マジかよ!!!」

「ちよつとゲン！それ言わない約束でしょー!!魔理沙も笑いすぎー」

「そんな事言つてたかなー！ハハハハ」

結果から言うとは意外と酒の強さは健在らしく、酔いもそこまで無かつたため飲み続けた。

調子に乗つて色々とするのはどうやら最近の妖怪はむやみに人を襲わないらしい。

理由はよくわからん。あと霊っぽいのが付いてるお二人は妖怪ではないらしい。

「お酒強いじゃないですかー！ゲンさんの嘘つきー」

「そうかなー！ちよつと俺トイレ！」

「精々頭ぶつけて死なないようにしなさいよー」

「ねーよそれは！」

あー腰いてえ、ずつと座つてたからか？それに頭も・・・ちよつと飲みすぎたか？

つていうか目が歪むなー、あれ、暗い、力がはいらねえ？あつこれヤバ

「あつゲンさん！おはようございます！大丈夫ですか！」  
「知らない天井だ・・・」